

# 科研費の充実のために分子研に期待すること

片岡 幹雄 奈良先端科学技術大学院大学 名誉教授  
高エネルギー加速器研究機構 ダイヤモンドフェロー



科研費の採否がもうすぐ発表されますね。今年のは首尾はいかがだったでしょうか。私は、所属していた大学の理事に就任した時に、“本学では理事には科研費の受給資格はありません”と説明を受けました。科研費を獲得し続けなければならない重責、重圧からの解放感を感じるとともに、科研費申請ができない、つまり研究者としては終わりという寂寥感を強く感じたものでした。

今から18年前の夏、平田文男さんや桑島邦博さん達と特定領域研究の立ち上げのために、分子研会議室で朝から議論を重ね、翌年度の採択につなげました。その後、このグループ研究から2回続けて新学術領域研究が生まれ出されました。このような大型のグループ研究のほかに、個人研究でも支援を継続して受けました。審査員をほぼ2年に1回の割合で務めたほか、日本学術振興会の学術システム研究センターの専門研究員として、科研費の審査員の選定とその評価にも携わりました。私の研究人生は科研費によって支えられてきました。

昨年度は、1,300余の研究機関から10万を超える科研費の申請があったようです。科研費への期待が大きいのにもかかわらず、予算は増えず、その結果

採択率が30%から25%に低下してきました。このような状況で、採択につながる競争力のある申請書を書く能力が、研究者には求められています。多くの研究機関で科研費の書き方の講習会が開かれており、読みやすい申請書が多くなったのは喜ばしいことです。けれども、個性がなく可も不可もない申請書が増えてきているのも事実です。研究者の顔が見える申請書を書いてほしいものです。

3年前に科研費大改革が行われ、審査方式が大きく変わりました。この改革に伴い、審査員の数も5,000名から7,000名に増加しました。審査の質の維持向上が重要であることが理解できるでしょう。昨年度は、業績欄の廃止という大きな変化もありました。これは、インパクトファクターや筆頭著者のみを重視する審査員が少なからず見受けられたことも遠因です。実験の人が理論の審査をするなど専門外の申請に対しても、広い視野から公平な審査をすることが望まれています。

現在、様々な官民の助成金があり、理工系においては研究費に占める科研費の重要性は相対的に低下しているかもしれません。しかし、政策目標等とは距離を置いて、あらゆる分野の研究

者の自発的で自由な発想の研究を広く支援する科研費は、日本の研究を支えるもっとも重要な制度です。科研費の充実なくして、日本の科学技術の進展は望めません。科研費の充実に対して研究者ができることは、申請の質すなわち研究の質の向上と、審査の質の向上に寄与することです。前者に対する分子研の寄与は疑いのないところですが、審査員を輩出することで審査の質を高いレベルで維持し続けることにも寄与していただきたい。若い人は審査員に選ばれるように、存在感のある研究者になってください。また、分子研や総研大での研究者養成教育に、他者の研究を正しくかつ批判的に評価し文章化する能力の涵養、すなわち審査員養成の教育もぜひ含めていただきたいと願っています。

かたおか みきお

東北大学理学部物理第二学科助手、大阪大学理学部生物学科助教授、同宇宙地球科学専攻助教授を経て、1998年奈良先端大物質創成科学研究科教授。同研究科長、副学長を歴任し、2013年同大学理事・副学長。2017年任期満了により退職後、今春まで東海村の総合科学研究機構中性子科学センターに勤務。今でも不定期に東海村に通い、中性子生命科学の振興に携わっている。生物物理学特に光生物学とタンパク質物理学が専門分野。